

ドキュメンタリー映画「分子の音色」の監督

すぎ もと のぶ あき 杉本 信昭さん(64)

ひと



1956年生まれ。映画「蜃気楼劇場」「自転車でいこう」「谷川さん、詩をひとつ作ってください。」を手掛ける。

「科学にも音楽にも興味ないのに、僕はなぜ、2人の存在にひかれるのだろう」。こんな問い合わせが映画の出発点だった。

映画に登場するのは、有機化学者で東大特別教授の中村栄一さんと古楽器奏者の渡邊順生さん。世界で活躍する2人は中学、高校の同級生だ。映画は昨夏、中村さんが趣味のバロックフルートで、渡邊さんが Chernobyl

で、70歳を記念した小さな演奏会を開いた場面から始まる。杉本さんは映画の中で、自由な校風の2人の出身校の思い出や、人生を左右した恩師との出会いを丁寧に描く。大学時代、中村さんは実験の爆発で失明しけれど、科学者として生きようと決意する。一方、渡邊さんは生まれて初めて、わずか數十分、 Chernobyl を弾かせてもらった。

その日に「プロになる」と心に決める。なぜ2人が「好きなこと」を見いだせたのか、それを真っすぐに追いかけられたのかが、映画を通して見えてくる。

「この国で『個人』として生きるのは難しい。自分を貫けばバッシングされる。だから多く人が萎縮する。でも2人は自分の決めたことに迷わず情熱を傾ける。そんな『純情』などころに僕はひかれたんだと思う」

作品は16日から、東京都中野区のポレポレ東中野など各地のミニシアターで上映予定。

特に若者を見てほしいと願う。「多数派の意見になびかなくていい。自分で決めて目の前でできることを積み重ね、次の一步を踏み出して『個人』として生きよう」と伝えたいから。

• 小国綾子
• 本人提供
2021.10.15

